

---

# 何でも屋エリスでございます

魔帝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何でも屋エリスでございます

### 【Nコード】

N8576Z

### 【作者名】

魔帝

### 【あらすじ】

一人の男が、家族を愛する、戦いの物語。

過度な期待はしないでね？

## 序章第一話（前書き）

これは私の創作意欲が溢れ出して出来た作品です。その為更新は不定です。

ただし、万が一、億が一、そこそこ評価が良かったら熱を入れて書くつもりです。

## 序章第一話

古代ベルカのとある場所。戦乱の地で埋め尽くされたこの世界の何処かに、彼はいた。家もボロボロで小さく、お世辞にもお金があるとは思えない感じだった。

黒髪紫目の彼はそこで己の商売道具でもあり一生の相棒……今の時代には似つかわしくない質量兵器である、黒い刀の手入れをしていた。

「……………うん、今日も綺麗だ」

少々長いめの刀を黒い鞘を納め、壁に立て掛けた。彼は黒いインナー姿に黒の長ズボンに姿でおんぼろのベッドに寝転んだ。

「あゝ……………仕事ねえかね……………」

彼の職業は所謂傭兵、何でも屋のようなものだ。依頼があれば戦場に赴き、敵をバツバツ斬り伏せ、報酬を貰う。ただ……。

ジリリリリ……………！

「はいはい、こちら『エリス』でございまーす……………そこはもう敗戦まじかだろ。金にならん……………何？ 報酬ははずむだと？ 敗戦国に

そんな金は無いだろ。さいなら」

と、このように自由気まま、気分屋、面倒くさがりなのだ。だから仕事が無い。ただ、実力はある。だから依頼の電話がくるのだ。

「まったく……毎日が退屈だな」

このご時世、そんな事を言うのはもの凄く場違いなのだが、彼には関係ない。

ジリリリリリ……！

そしてまた電話がかかる。

「はいはいこちら『エリス』……拠点に籠った敵の殲滅？ 相手は数百人？ 金払えんの？ ……オーケー、受けてやる」

彼は電話を切り、掛けてある刀と黒のロングコートを取り、外に出た。

バキッ！

「…………あゝ…………」

彼がドアノブに手をかけてドアを開くと、ドアが壊れて取れた。

「……………後で直さないとな」

ドアを立て掛けて彼は戦場に赴いた。

どっかの研究施設。そこに今回の依頼国側の敵が潜伏している。

「ふんふん」

そこに彼が現れた。彼は鼻歌を歌いながら施設の前まで歩き、敵を視認した。

「止まれ！」

「と言われて止まる馬鹿はいない」と

見張りの兵士達だろうか。その兵士達が杖を彼に向けていたが、彼は臆することなくご機嫌に施設へと近付いた。

「このっ……撃て撃てえ！」

彼に向かって一斉に魔力弾が放たれた。

「遅いっつうの」

彼はその場から消えた。そして兵士達の後ろに現れた。彼の手は鞘から少し抜かれている刀の柄を握っていた。

「取り敢えず、死んどきなさい」

チン……と音を立てながら鞘に納めると、兵士達の身体が言葉通り両断された。

「さてさて……敵さんは何処ですか？」

彼は優雅に施設内を歩き始めた。そして見つけた敵から片っ端に斬り伏せて行った。

「どいつもこいつも骨の無い奴だな。誰かいなのか？」

「ここに居るぞ」

彼の前に一人の女騎士が現れた。ピンクのポニーテールにアームドデバイスである剣を持った騎士。

そしてその横にはオレンジ色の髪で鉄槌をもった紅い女の子。短い金髪で緑色の服を着た女性。青髪で筋肉モリモリの長身の男性。

「ほう？」

彼は不敵に笑った。まるで発売数か月前に予約したゲームを手に入れた様な顔だった。

「女が相手か……だが強いな。そっちの子供も、男も。……アンタは……まあ攻撃には向いていないな」

一人一人を分析し、己の相棒に手をかける。騎士たちも剣を、鉄槌を、拳を、指輪？を構えた。

「行くぞ、手加減は出来んからな」



彼は地を蹴った。

「チッ……」

結果的に彼は勝った。だが彼が騎士たちを殺してはいない。騎士たちは撤退していったのだ。そして彼も肩に一筋の切傷を付けられていた。

「ふう……中々強い相手だったな。また戦いたいものだ。その為には……」

彼は走った。それも肉眼では捉えきれない程の速さで。

「先回りして約束でも取り付けますか。またやり合いしましょうってな」

彼は本来の目的を忘れ、騎士たちを待ち伏せする事しか頭になかった。

彼は走っている途中、とある一室から声がするのが聞こえた。彼はそれで本来の目的を思い出し、まあ見つけたからやるかといった感じで扉を開けた。

「ハロハロ、『エリス』です。お命頂戴……い？」

「っ！ 貴様は！」

その部屋には先程の騎士たちとこの研究員らしき人物が数人と、一人の銀髪の女性と一人の女の子がいた。

女の子はボロボロの服を着ており、食事を与えられていないのか痩せ細っていた。

「ほら見る！ 貴様らが役立たずのせいでここに来てしまったではないか！」

一人の研究員が騎士たちに向かって叫ぶ。銀髪の女性は女の子を後ろに俺を警戒し、騎士たちに指示を出した。

「騎士たちよ、我が主を守るのです！」

騎士たちは武器を手に彼を取り囲んだ。

「あゝ……取り敢えず、その女性は誰ですか？」

彼はそんな状況は知ったこっちゃないと言わんばかりに、銀髪的女性を指した。

「ふん！ 貴様を知る事ではない！ さつさとやれ！」

「わーわー喚くな。煩い」

彼がそういうと、黒い魔力で出来た短剣が部屋中を埋め尽くした。切っ先は騎士達と研究員たちに向いていた。

「ふうん……状況から察するに、ここの研究員がその女の子に暴行を働き、その子を守るためにこいつらが働いている……そうか？」

彼は銀髪の女性にそう尋ねた。しかし女性が口を開く前に研究員の一人が開いた。

「何を馬鹿なことを！ こいつらはただの道具に過ぎん！ 我々の指示通りに動く兵器だ！」

「……あつそ。なら壊して良いよな？」

「壊せるものなら」

「はい、死んだ」

黒い剣が研究員を蜂の巣にした。続いて彼は他の研究員を睨みつけ、睨まれた研究員は逃げ出すか、騎士達に命令しだした。

「な、何をやっている！？ は、早く殺せ！」

「お助けえ〜！！！」

「無に返れ」

黒い剣が一斉に研究員に向かって射出された。全ての剣は研究員を貫き、切り裂き、串刺しにする。

やがて全てが終わると、今度は銀髪の女性とボロボロの女の子を見た。女性は彼に向かって拳を構えた。

「……………」

彼はそんな女性にふっと笑って見せ、ゆっくりと近付いた。騎士達は彼を近づけさせまいと襲い掛かったが、彼から発せられた魔力波により近づけなかった。

「……よう、嬢ちゃん」

彼は女性と女の子から少し離れた場所で腰を低くし、女の子の視線に合わせた。

「こんな所にいて楽しいか？」

「……（ふるふる）」

女の子は首を振った。彼は優しく微笑み、手を伸ばした。

「じゃあさ、俺の子になるか？」

「「「「「……は？」「」「」「」」

その場にいた彼と女の子以外が間拔けな声を上げた。襲撃してきた男がいきなり俺の子になれと言ったのだから無理も無い。

「ただし、働かざるもの食うべからずだ。嬢ちゃんにはウチの受付嬢でもしてもらおうかな」

「……な、何を言い出すのだ！」

ポニーテールの騎士が怒気を含めた声で尋ねた。

「アンタらも、こんな湿気た場所で暮らすのも嫌だろ？ 俺の家も大概だが、ここよりは断然マシだ。衣食住付けるぜ？」

「うつせえ！ どうせテメエも闇の書の力が欲しいんだろ！」

鉄槌の女の子が怒鳴った。

「闇の書？ んじゃそら？ 俺は本なんて興味がねえよ。眠くなるし」

「ざけんな！」

鉄槌の女の子が彼に向かって鉄槌を振り下ろす。が、彼は突如出現させた黒い剣でそれを受け止めた。

「うんうん、子供は元気が一番だ」

「アタシを子供扱いするな——！」

「嫌だね。子供は子供だ」

彼は鉄槌の女の子の後ろ襟を掴むと、ポニーテールの騎士に向かって放り投げた。彼は放り投げた後、再びボロボロの女の子に振り返った。

「で？ どうする？」

「……みんな……一緒？」

「ああ。大歓迎だ」

「……じゃあ……なる」

「我が主！？ 本当に言っているのですか！？」

銀髪の女性は驚き、女の子を見た。

「うん……。もうみんながおこられるのみたくない……」

「我が主……分かりました。あなたの言うとおりにします」

「闇の書！ 何を言っているのだ！ こんな得体の知れない奴に……！」

「ですが、ここにいるよりはずっとマシでしょう。……貴方」

「ん？」

銀髪の女性は彼を真剣な表情で見つめた。

「我らを傍に置くと、貴方までも狙われますよ？ それでも宜しいのですか？」

「狙われるね……。俺ってさ、傭兵みたいなものしてるからさ、敵が世界中にいるんだよね。だから狙われるなんて慣れっこさ」

「……そうですか」

「ああ、でも……」

「……？」

「お前らを守り通すくらい、朝飯前だ」

彼は女性に手を差し出した。女性は少しだけその手を見つめると、彼の手をそつと握った。



## 序章第二話（前書き）

更新します。設定が少々違うかも。

## 序章第二話

何でも屋『エリス』。その朝は少女の大声で始まる。

「起つきろおおおおっ！」

「んおっ！？」

ベッドの上で寝ていた彼は少女の声により飛び起き、ベッドから落ちた。

「つつ〜……！ ファン、頼むから普通に起こしてくれ……」

「お父さんがそれじゃあ起きないからでしょ！ 朝ごはん出来てるよ！ 皆ももう起きてるから！」

「はいはい……」

「はいは一回！」

「はい！」

突き出されたお玉に、彼は即座に敬礼し、テキパキと身支度を始めた。

彼        イヴァシリア・ムトス・エラフィクス、通称イヴァは女の子  
             ファン・エラフィクスを引き取って父親代わりになった。  
ファンは闇の書という魔導書の主で、騎士達はその守護騎士プロ  
グラムであり、銀髪の女性は闇の書の管制人格であり、主と融合し  
て戦う事ができる『融合騎』である。

更に闇の書はもともとは違うものであり、それが何時の日か破壊  
を呼ぶことしか出来ないようになったそうだ。そして闇の書は魔法  
の源である『リンカーコア』を吸収し、魔導書の頁を増やし、全6  
6頁まで完成させると持ち主に凄まじい力を与える。

だがファンはそんなことはしたくないと言い、ただ幸せに暮ら  
したいという願いから何もせず、この数年間はただ普通に暮らして  
いた。

「おはようさん」

「おはようございます、イヴァ」

最初に挨拶を返したのは銀髪赤目の女性、闇の書の管制人格だ。

「寝癖が付いていますよ」

「ん？ ああ…サンキュ、ヤミっち」

イヴァは彼女の事を闇の書から取ってヤミっちと呼ぶ。

「兄ちゃん、早くしろよ！ 腹が減って仕方がねえ！」

「はいはい、悪かったね」

イヴァは鉄槌の女の子      ヴィータに急かされ、席に座る。こ  
こでの掟はご飯は皆で取るという、ファンが決めたのだ。

「イヴァ、まさかまた夜更かしをしたのではないな？」

ポニーテールの騎士      シグナムがイヴァを睨む。

ここでの掟その二、早寝早起き。

「俺は夜行性なの。ベッドの上じゃ王者だぜ？」

「イヴァさん」

「ん？」

「後ろ」

「へ？ ばふっ！？」

イヴァの顔面にフライパンが炸裂した。先程イヴァを後ろに向かせたのは緑色の服を着ていた金髪　シヤマルである。そして顔面にフライパンをお見舞いしたのはファンである。

「お父さん！　朝から何言ってるのよ!？」

「ナニだ」

「ふんっ！」

もう一撃炸裂。思春期の女の子にはいけないワードのようだ。

「イヴァ殿、今日は屋根の修理ですか？」

「あ、ああ……そうだな。風が冷たいし、さっさと直さないとな」

そして青髪の筋肉モリモリくん　ザフィーラ。彼は人型と青い狼の姿になれる。

「はい、じゃあ食べよっか！」

ファンが用意した朝食を、家族全員で食べる。これが当たり前。光景で、とても貴重な幸せなのだろう。

ジリリリリ……！

「はい、お電話ありがとうございます！ 何でも屋『エリス』です  
！」

今日もまた電話が鳴る。ファンが来てからこの電話は頻繁に鳴る。それもその筈、イヴアが出ると大抵の事は断ってしまい、ファンの場合はどんな事でも引き受ける、真の何でも屋になるからである。

「搜索の手伝いですね？ 分かりました！」

この様に、本当にどんな事でも引き受ける。

「ザフィーラー！ お仕事だよー！」

こうやって騎士たちも巻き込んでいる。そして肝心の店主はとい  
ひ……。

「ん、行つてこいザフィーラ。後は俺がやって置く」

「かたじけない」

「いつてら〜……はあ……戦いの仕事は無いのか……」

店員もとい家族が増えた事により、自分に仕事が回って来ない。故に家に籠りつ放しのニートくんである。因みに、シグナムは警備の仕事、シャマルは戦争で避難してきた人達を治療している。イヴァはもっぱら戦闘しか引き受けなかった。

「イヴァ、手伝いますよ」

「お、悪いなヤミっち」

そしてヤミっちもちゃんと役割がある。この家の家政婦さんである。まだ子供であるファンには限度というものが。それを補う為にヤミっちがしっかりしている。

「しかし、古くなってきたなあ……」

「ここは貴方の曾祖父から続いているのですよね？」

「ああ。ここで爺さんが産まれて、母さんが産まれて、俺が産まれた。そして今はお前達がやって来た。これからもずっとこの家を守っていくさ」

屋根の修理をしながらイヴアは昔を思い出す。昔はもっと綺麗で、埃一つ無かった。母も父もいたが、今はもういない。

「では……貴方の娘であるファンも何時かはこの家を守って行くのですね」

「そうなるな。……妻もいないのに娘ってなあ……」

「……やはり、欲しいのですか？」

「そら欲しい……が、もう良しさ」

「何故ですか？」

イヴアは屋根から降りてヤミつちを見た。

「だって、もし俺が女なんか連れてきたら、お前嫉妬するだろ」

「なっ、しません！」

「どうかな？ 確か俺が街で女性相手に話ししてたらお前ムスッてしてたじゃん」

「気のせいですー！」



ヤミっちは顔を紅くしてイヴァに反論した。しかしイヴァはその姿を見て笑っているだけだった。ファンも外に居る二人を窓から見ていて、笑顔を浮かべていた。

ファンは願った。

この幸せが何時までも続いて欲しい。何時までも何時までも笑顔で溢れていて欲しい。家族みんなで生きていきたい。

そう願った。

だけど、神の悪戯か、運命か、それは叶わぬ願いとなった。

ファンが倒れた。

しかも足が動かなくなった。徐々に身体が弱っていつている。

原因は分かっている。闇の書だ。闇の書がファンから足りない魔力を吸収しているのだ。このままではファンは死んでしまう。なら闇の書を完成させなければならない。その為に、イヴァたちは動いた。

幸い、今は戦乱の世。リンカーコアには困らない。戦場に赴き、片っ端からリンカーコアを蒐集していった。が、まだまだ闇の書は完成しなかった。

「ファン……」

「お……とうさん……」

「何か欲しい物はあるか？」

「うん……何もいない……」

「……もう少しで治るからな？ 頑張れ」

「うん……でも……」

「うん？」

「傍に……いて欲しいな……」

ファンはイヴァのコートの裾を掴んだ。イヴァは拳を握り、ベッドの隣に座った。

「ああ、いるから。安心して寝てくれ」

「うん……」

イヴァはファンが眠りに着くまでファンの手を握りしめた。やがてファンが眠ると、そっと手を離し、外に出た。

「……助けてやる……絶対に……！」

イヴァはその場から消えた。戦場に赴き、蒐集を始めた。

蒐集を始めてから数週間。今日はイヴァだけで蒐集をしている。他の皆はファンと共にいる。

イヴァは今日の蒐集を終え、皆が待っている家に帰った。

家に帰ると、イヴァは異変を感じた。結界が張られている。しかも魔力を遮断する珍しい物だった。

皆にそんな結界は張れない。なら何者かが張っている。イヴァは急いで結界ぎりぎりまで近付き、魔法で強化した目で窓から家の中を見た。

なかでは何処かの軍人が数名、ファンを人質に取り守護騎士達を拘束していた。

「何でファンが人質に！？ あいつらの実力ならそんなヘマは……っ！」

家の屋根に大きな穴が開いていた。しかもファンの部屋の天井だった。彼ら軍人は誰にも気づかれずに屋根を壊して進入したのだ。そしてファンを確保し、守護騎士達を拘束したのだ。

「くそっ！ 奇襲をかけるか？ けど敵の数が分からない！ いや、あいつらも馬鹿じゃない、俺が奇襲をかけることだって呼んでいる筈だ！」

イヴァは必死に攻略方法を考えた。しかし、時は待ってくれない。軍人のリーダー格の男が何かの指示を出すと、数名の軍人がザフィラ以外の守護騎士を押し倒し、陵辱を始めた。

それを見た瞬間、イヴァは刀を抜き取り、消えた。そして現れたのは軍人達の目の前。イヴァは一瞬で室内にいる敵の居場所と数を把握し、黒い魔力剣を射出。そして刀を振るい、リーダー格の男を

「待っていたよ、傭兵君」

切り伏せる前にバインドで身体を拘束された。射出した剣も、ほんの数名は命中したが、残りは避けられていた。

「いやいや、君が単純な男で良かったよ。君のおもちゃを取り上げようとしたら、君は一直線に飛んでくるだろうと思ってね」

「おもちゃ……だとお……！」

「ああ。もつとも、私達は兵器、道具として扱うがね。こんなものに意思など不要」

軍人がヤミつちを蹴り飛ばした。反攻したいが、ファンを人質に取られていて何も出来ない。

「てめえ……俺の家族に手を出してんじゃねえ……！」

イヴァは黒い魔力を溢れ出させながらバインドを引き千切ろうとした。が、杖で殴られて途中で止めてしまう。

「家族か……。君は変な趣味を持っているな。ただの道具を家族にするとは」

「テメエのような屑で世界の汚物には理解できねえんだよ！ 能無し！」

「っ……これだからゴミは困る。おい、さっさとこれらを運び出せ。それとこの男は殺せ」

軍人たちはファンを連れて行こうとした。イヴァはどうするか考えた。このままではまたファン達は道具のような人生を歩まされる。生きている事なんて感じさせないような最悪な人生を。

その時、イヴァは頭に何かが引っ掛かった。奴らはなぜファンたちを狙う？ 闇の書が欲しいのならそれだけを奪えばいい話だ。だが闇の書は闇の書が決めた人間でないと扱えない。そして選ばれた人間はファンだ。ならファンをどうにかすれば……。

イヴァは連れ去られていくファンの顔を見た。今にも死にそうで、苦しがつて、苦痛に耐えている表情だった。

次に守護騎士達を見た。皆は屈辱と悔しさ、絶望が支配している表情だった。

「……………」

イヴァは決めた。これから行う事は自己満足の中の自己満足。勝手に自分で決め付けた、自分だけの為の解決策。それは

「皆……ごめん」

「なっ、何をしている!？」

それは      ファンを……家族を殺す事だった。

イヴァはバインドを強引に引き千切り、近くにいたシャルルの身体を斬った。

「      っ!」

驚いて誰も動いていない隙にザフィーラを斬り殺した。痛みを感じないように素早く、綺麗に殺した。

ヴィータも、痛みを感じる暇を与えないで斬り殺した。

イヴアの顔は歪んで、涙でいっぱいだった。

正氣に戻った軍人たちは一斉にイヴァを殺しに掛かるが、イヴァは氣にも留めず、シグナムを斬り殺した。その時、シグナムと目が合い、シグナムは覚悟した表情だった。

「つ、つ、！」

それが余計にイヴアに苦痛を与えた。だがまだ終わっていない。残りには愛する娘と、恐らく心から愛する女性がいる。

軍人が放つ魔力弾がイヴアの身体に命中する。血が噴出し、臓器を破壊していく。だが止まらない、止められない。

イヴアは唇を噛み締め、ヤミっちを…闇の書を斬った。そしてフアンを……斬った……。

「あああああああああつっ！！！！！」

そしてイヴァも、叫び声をあげ、弾丸に貫かれながら倒れた。しかしその時にイヴァは魔力剣を四方八方に連続掃射し、それに巻き込まれた全ての軍人の命も消えた。

イヴアは薄れゆく意識の中、自分が殺した家族を見た。

「……シグナム……」

何時も強く気高い、剣のような意志を持っていた騎士。

「グイータ……」

子供扱いすると怒り、けれど子供のようににはしゃぎ回る騎士。

「シャマル……」

家事が破壊的で、何時も健気に皆を気遣っていた騎士。

「ザフィーラ……」

一見怖そうだが、子供にはとても優しく、男二人で何時も話していた騎士。

「ファン……ヤミっ……ち……」

娘として愛してきた優しい少女と、多分初恋だった相手の、闇の



書の管制人格。

全員、自分が殺した。自己満足な助け方で殺した。愛する家族を全員殺した。

そして自分ももうすぐ死ぬ。騎士達とは同じところへはいけない。騎士達は闇の書と共にまた違う場所へと消える。

けど、ファンと同じところへもいけない。一人孤独に、永遠の闇へといく。

「ファン……………向こうに行っても……………かぞく……………つく……………れ……………よ……………」

イヴァも眠る。後悔と絶望を胸に、闇へと堕ちる。

イヴァシリア・ムトス・エラフィクス。享年25歳。  
ファン・エラフィクス。享年13歳。

闇の書は新たな主を見つけ出し、また破壊の限りを尽くす。

嘗て家族がいた事を忘れて、破壊を続ける。

## 第一章第一話（前書き）

また投稿。序章第二話を修正いたしました。

## 第一章第一話

ミッドチルダのクラガナンのひっそりとした、誰もいない暗い場所。その場所に、お世辞にも綺麗とは言えないおんぼろのレンガ造りの建物がある。

看板が一応立てられてはいるが、ボロボロでじっくり見ないと読めないほどだ。

ジリリリリリ……！

その建物の部屋のデスクの上にある電話が鳴る。やがて部屋の置くからばさばさの黒髪の男がダルそうに出てきた。男は椅子に座り電話を取る。

「はいはい、何でも屋『エリス』でございます。ご用件は何でございますでしょうか」

男は驚くほど棒読みで決まり台詞を口にした。

何でも屋『エリス』…それが男の職業である。

「……あ？ 迷子の子猫？ 写真ある？ 結構、そっちに行くから

住所を。……あいよ、五分で向かう」

電話を切り、男は自分のシンボルである黒のロングコートを着て外に出た。その際、扉を強く閉めすぎたのか、変な音を立てて取れた。

「あー……また直さないとな」

扉を立て掛けて空を見上げる。

「……今日も良い天気だ」

男はそう呟き、その場から消えた。

「ねーこさん、ねーこさん、どこにいる?。」

男は即興で歌を作りながら街を練り歩く。

「にゃーお、にゃーお、にゃー……お?。」

やがて男は木の上に首輪をつけた白と黒の毛を持った猫を見つける。持っている写真と照らし合わせて、右足に同じ模様が付いているのを確認した。

「見つけー！ さあ……大人しくしんしゃい！」

男は地面を蹴り、猫がいる木まで近付いた。

「昇竜拳！」

錐揉みしながらジャンプし、猫を捕まえた。

「はっはっはー！ 観念」

「フシヤアアア！」

「いてっ！？ いててててっ！！」

猫は男の顔面を爪で何度も引っ掻いた。それはもう何度も何度も。

「痛いって！ ああもうっ！ 大人しくしやがれってんだあああっ

「……」

男は気迫で猫を黙らせた。猫はプルプルと震えだし、男の腕の中で丸まる。

「よしよし。こっちも仕事なんだ、我慢してくれ」

猫を頭の上に乗せ、依頼主の家に向かう。

「お前だつて外の空気吸いたいよなー？」

「……にゃー」

「だよなー。自由ってモンが欲しいよなー？」

「にゃー……」

「定期的に外に行くべきだよなー？」

「にゃー！」

あら不思議、もう男は猫と意気投合していた。そのまま色々と会話しながら、依頼主の家へと向かった。

「らっしゃーい！」

仕事を終えた男はミッドにはもの凄く珍しい存在の屋台へと来ていた。

「おっちゃん、熱燗くれ。あと大根と竹輪と玉子」

「あいよ」

出された酒を飲み、今日の収穫を確認する。

「お？ 今日たくさんあるね？」

「今日は五件も仕事が入ったからな。今日は飲み明かす！」

「そりゃありがてえ。だがそんな事はつかしてつから一向に金が貯まらねえんじゃねえの？」

「うっせ。俺は一日一日を凌げば十分だ。それに……」

「それに？」

「いつか俺を養ってくれる女が現れるって」

「はいはい、もっと前を向きな。はい、こんにやくサービス」

「ラッキー！」

男と店主は他愛無い会話をしながら夜を過ごしていった。  
すると、男の隣に一人の女性が座った。

「らっしやい！」

「私も彼と同じのをくれる？」

「げっ……」

「あいよ」

男はあからさまに嫌な顔をして女性を見た。緑の長い髪をポニールにし、彼以外が見れば嫌な顔などせずに鼻の下を伸ばしてしまっほどの美女だった。

「お久しぶりね、ファン」

「……リンディ」

男      ファン・フィクスは目の前の女性

リンディ・ハラ



オウンに舌打ちをして酒を飲んだ。

「何度も電話したのに、貴方私だけ着信拒否してるでしょう？」

「悪いかな？ 友人の女を取りたくないんでね。美人な大人の女は大好きだからな」

「その割には、とても嫌な顔をするのね？」

「嫌だからな。おっちゃん、酒」

「あいよ」

ファンは若干不機嫌になり、酒をグビッと飲んだ。リンディは苦笑して出されたお酒を飲んだ。

「で？ 何の用なんだ？」

「あら？ 友人に会いに来るのに理由があるのかしら？」

「そりや恋人だろ。大体、お前は時空管理局提督で巡行艦『アースラ』の艦長様だ。ただ会いに来る為だけに場を離れないだろ」

どうやらリンディは管理局という組織のお偉いさんの様である。しかし、その人を前にしてファンの態度はどうかと思う。

「当たり前。実は協力して欲しい事が」

「断る」

「どうして？」

「どうして？ お前が絡むと碌な事が無い。何時だったか？ お前に頼まれて向かった世界の先には千を超える大犯罪者の集団、更に違う件では凶暴な生物が数百、その全てがなかなかどうしてかタフ。また違う件では原住民族に襲われる、はたまた別ではいきなり女性しか居ない所に放り投げられて痴漢と勘違いされる、かと思ったら今度はイケナイ男性しか居ない所に放り投げられて危うく掘られそうになる。まだまだあるぞ？ 聞くか？」

「あ、玉子も貰えるかしら？」

「あいよ」

「聞けやおい！」

リンディはファンの訴えを一言も聞いていなかった。よく見るとリンディは結構な量を食べ進んでいた。

「聞いてるわよ。でも、それでもずっと助けてくれたわよね？」

「クライドに貸しがあったからやったまでだ。それが今はもう無い。よって協力しない」

「どうしても?」

「大体な、アレ全部タダ働きだったんだぞ? いくら俺が戦いが好きだって言ってもそりゃねえぜ」

「それじゃあ、客としてお願いするわ」

「お引取り願います」

綺麗サッパリと断った。考える素振りも見せず即答で断った。リンディはちょーと眉をピクリと動かして良い笑顔を浮かべた。

「どうしてか、教えてくれる?」

「メンド 嘘です、だから俺の酒を奪うな!」

ファンはリンディから酒を死守し、リンディを睨んだ。リンディは臆することなく話を進めた。

「それじゃあ、頼まれてくれるかしら? “ 魔人さん”」

「……高くつくぞ?」

魔人と呼ばれた瞬間、ファンは雰囲気を変えた。

「大丈夫。ちゃんと現金で即払いよ」

「……内容は？」

「今、第97管理外世界で事件が起こってるのよ」

「……地球か？」

「ええ。知ってるかしら？ ジュエルシードというロストログアを」

「持ち主の願望を叶えてしまうという事しか……まさか地球にあつて、それを狙う奴がいるのか？」

「話が早くて助かるわ。そう、ある一人の魔導師が地球でジュエルシードの回収を行っているの。そして此方にも地球で見つかった魔導師に民間協力者として二名いるの」

「……地球で？ それはまた、珍しい」

ファンは口の端を吊り上げた。彼の中ではその二名との戦闘を思い浮かべているようだ。

元々、地球では魔力を持つ者がいない。それどころか、魔法文化というものがない。あったとしてもお伽話程度だ。なのに、そこで見つかった。

「言うておくけど、どちらも十歳ぐらいの子供よ。狙ってる魔導師

も」

「……じゃあ俺に何をしろというんだ」

流石に子供とは戦えないのか、ファンは落胆した様子で仕事の内容を聞いた。

「実はね、その民間協力者の一人がどうも危なっかしいの」

「どういう風に？」

「有体に言えば、力だけを暴れさす馬鹿よ。それに、自己中心的な考えを持つてるの」

「それは気に入らないな」

「貴方ならそういうと思ったわ。だから依頼する内容は二つ。その子を教育するのと、その子の監視。貴方なら出来るでしょう？」

「それ程なのか？ その餓鬼は」

ファンは少し驚いている。彼は驕っているわけではないが、本気を出せば世界の一つや二つ、破壊させる事が出来ると自負している。それ程の実力を持つ彼に、まだ幼い子供の教育と監視を頼むのだ。

「ええ。純粋な力だけなら、貴方の一步、いえ二歩下かしら？」

「……分かった。だが子供同士の喧嘩に俺は介入しないからな。精々アースラから見るだけだな」

「結構よ。じゃあ、契約成立の証として……」

「お？ 驕ってくれんのか？」

「驕ってくれる？」

「いやお前が驕れよ、そこは！」

結局、ファンの驕りで乾杯をする事になってしまった。それからリンディの息子のクロノ・ハラウンが迎えに来るまで飲み続けた。

因みに、屋台のおっちゃんはその筋に深く関わっている人間なので、聞いていても問題は無い。

いきなりで悪いが、彼らは所謂転生者である。前世で死に、前世の記憶を持ちながら、この世界に新たな命として生まれて来た。しかも、特殊能力を神から授かり、今生を生きている。

ある者はこの世界の物語に介入したり、ただ傍観しているだけだったり、私利私欲のまま生きたり、力を隠して一般市民として生き

たり、様々な生き方をしている。

その中の一人、白髪紅目の一人の少年、黒島蓮夜くろじまれんやがいた。彼はこの世界に転生し、彼の世界で物語だったこの世界での主要人物、高町なのはと隣同士となった。この少年と少女の両親も友人同士で、産まれた時から交流があり、自然と幼馴染となっていた。

そして蓮夜は次第にある考えを持ってしまった。自分には誰にも負けない最強の力がある。そして自分は主要人物と幼馴染という立場にある。だからこの世界は自分の為に存在する世界だと。そう思い込んでしまった。

そして彼の他にもまた転生者は数多く存在する。その転生者も物語に関わりたいたが為に、主要人物に近付いたり、その近くに居る同じ転生者を邪魔者扱いし、能力で押し伏せたりした。

が、蓮夜には敵わなかった。蓮夜は全てのベクトルを操作する力と膨大な魔力、更には異常な身体能力を持っているが為に、最強だった。それが幸和の考えを肯定しているかのようにだった。

そして、蓮夜は高町なのはとなのはが魔法を知るきっかけとなった人物、金髪で碧の瞳をした少年、ユーノ・スクライアと共にロス・トロギアの搜索と回収を管理局に民間協力者として行動している。これも、幸和のいる世界での物語の一部に過ぎなかったのである。

ある日、なのはと幸和とユーノはリンディに会議室に集まって欲しいと言われ、その場に向かっていた。

「大切なお話って何だろう？」

「ジェルシードの事かな？ 何か問題が見つかったとか？」

「俺達の管理局への勧誘じゃね？ ほれ、俺達もの凄く活躍してるから」

「そんな、まさか。いくらなんでもそんな事しないよ」

「けっ……（俺に意見出さなつつうの。てめえは俺を引き立てるただのモブキャラなんだよ）」

三人は会議室に到着し、中へと入った。中にはリンディとクロノ、その隣に見知らぬ黒いコート着た男がいた。

「（誰だ、こいつ。原作にはいなかった……という事はこいつも転生者？ まさか原作よりも何十年も前に転生してるとはな。大人組み狙いか？）」

蓮夜は男の招待を推測した。自分の邪魔をしないのならどうでも良いが、もし邪魔をするのなら排除するつもりだ。

「来たわね。あなた達に紹介したい人がいるの。とりあえず座って」

リンディの言われるとおり三人は席に座った。

「紹介するわね。此方は私の友人のファン・フィクス。管理局ではないけれど、私から直々に協力を依頼したの」



「（管理局じゃない……これはもう確定だな。絶対転生者だ）」

蓮夜はありったけの敵意をファンに向けるが、ファンは気づいていないのか、ちっとも反応しない。

「（けっ、俺の殺気に気づかないなんて、下っ端だな）」

蓮夜はファンを見下した。自分の壁にもならない存在として見た。

「（……さっきから目障りだな、あの小僧。自分が上だと勘違いしてやがる）」

だが実際は違った。ファンは最初から気が付いており、煙たく思っていた。

「彼は本日付けで黒島蓮夜君の専属教導官となつてもらいます」

「はあっ!？」

蓮夜は驚いた。最強である自分が教導される。何故自分が？あり得ない、冗談だ。そう思わざるを得なかった。あ

「何だよ！？俺の活躍見てたろ！？今更教えてもらう事なんかねえよ！」

「今だからこそ教えるのよ。力の使い方というものを」

「はあ！？意味わかんねえよ！」

「ごちゃごちゃ煩い餓鬼だ。餓鬼が大人に教わるのは当たり前だろ」

「アア！？雑魚がでかい口叩いてんな！」

蓮夜はファンに喰らい付く。まるで自分が最強だと、上だと、主人公だと。

「あら？彼は貴方よりも比べ物にならない程に強いわよ」

「止せよりンディ、照れるじゃないか。いくら真実だったとしても」

「そうね、褒めすぎたかしら。真実だとしても」

二人は笑った。まるで蓮夜に見せつけるように。蓮夜はその様子に苛立ち、つい口にしてしまった。

「なら！俺がそいつより最強って言っ事を見せてやる！そんなおっさんに俺が負けるはずねえからな！」

「……お、おっさ……！」

「あら……」

おっさん。その単語にファンは目を開き、リンディは言ってしまったと言いたげな表情を浮かべた。

もはや会話に入っていないのはとユーノはオロオロとしていた。

「上等だ……いまからお前を立てない程に痛めつけてやる。安心しろ、子供には優しくってというのが俺の信条だ。優しく痛めつけてやる」

ファンは不敵に笑いながら蓮夜を見下ろした。それが気に食わなかった蓮夜は、今にも殴りかかりそうだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8576z/>

---

何でも屋エリスでございます

2011年12月29日20時52分発行